人でつづる保育史

石原キク先生

高橋フミ

日本の幼稚園教育の草創期に、一生涯をこのひとつの事に献身しようと決心した十六歳の小娘が山口県の田舎に、名もなく小さく立てられたミッションの女学校の片隅にいました。

そして八十三歳五ヵ月の全生涯を東京のひとつの学校の中で若い日の夢を生き抜きました。その人、石原キク先生について私の知り得た限りのことを書くことにいたします。

先生の手記の中に次のような文があります。

「私の幼い頃、広島女子学院附属幼稚園に通っていた頃、美しい清らかなそしてやさしいゲインズ先生をこよなく尊く思われ、大きな憧れのまとであった。そのお話をきくことが何よりも嬉しかった。『大きくなったらあの先生のようになりたい』と思っていた。豊浦女学校を卒業すると私はまっすぐに東京保姆伝習所に入学した。私の幼い頭の中に芽生えた希望は私の生涯を決したものと言える」

私がはじめて石原先生に会ったのは昭和三十四年の春、東北の田舎から高校を卒業したひとりの娘をつれて石原先生の学校に入れてもらうために訪ねた時です。先生は幼稚園の方で園児と共に律動をしておられるところでした。もう七十歳を越しておられる先生がピアノに合わせてひょいひょいと跳び上がる時は園児よりも幼な子のように見え、渓流にあそぶせきれいのように清らかでした。

私が連れてきた娘と面接を終った先生は別室で待っていた私のところに来て、いきなり「あの娘さんはほんとうに幼稚園の先生になりたいのですか」ときかれ、「あの顔ではこまりますね」と言われた。私はど肝を抜かれるような思いでした。無愛想な顔つきの東北娘であることを気にしてただけに。

しかし、入学を許されて、先ず、笑顔のできる人になる修練を受けました。先生永眠後、前掲の手記を読む機会が与えられて再び初対面の時の「あの顔では困りますね」の意味をしみじみかみしめました。

女学校を卒業したばかりの小娘石原キクを明治三十五年に

山口県から東京に、幼児教育の勉強をさせるために連れてきたのは恐らく当時の女学校に関係していた婦人宣教師たちでありましょう。東京築地にバプテストの宣教師ミセス・タッピングが創設した保姆伝習所へ石原先生は入学したのです。その時八名の学生がいたという記録が残っています。ミセス・タッピングは当初幼稚園を開設したのですが日本人教育者の養成の必要を感じて伝習所を併設したのです。この伝習所は大正六年になってから東京府の公認となり、現在の彰栄保育専門学校になったわけです。

石原先生はこの伝習所で、当時の米国でフレーベルの教育精神と方法を主軸とした教育と技術を身につけて来日した数名の婦人宣教師によって幼児教育に必要な学課目の教授と実際の訓練を二年間習得したあと、五年間の米国留学の機会が与えられました。東京都市紀要（昭四一・二・一五）には「石原きく女史が最初に保姆の伝習所を受けたのは四谷時代の彰栄幼稚園の伝習所で、ついで東京府教育会の講習を受けているがその仕上げは米国であった」と記されています。また「履歴書は日本の幼稚園史上をかざる好資料ともおもわれるので現存者であるがつぎにのせることにした」と記されてあってその履歴書が全部記録されています。

米国留学の前一年間、石原先生はミセス・タッピングの家庭で家事の手伝いをしながら夫妻から生活指導を受けたのですが留学の道を開いたのもタッピング夫妻でした。

最初の一年はグランデンビルのデニソン大学で語学を習得し、翌年から二年間シンシナチ大学の保育師範学校で勉強して幼稚園教師の免許状を取得しました。続いて専攻科を一年とウェストン大学に移って一年の二年間、教育学、心理学、保育学を専攻しました。この専攻科の期間の学資は当時の大統領タフト氏の篤志によるもので、そのことについて石原先生は次のように書いています。

「卒業の日私はタフト大統領からホワイトハウスに招かれ大統領自らスカラシップを与えられた。そして私に学業に精進すること、日米親善に寄与するよう一層励むようとの言葉を与えられた。私は身に泌みてこの言葉を聞いた」

当時のアメリカは幼稚園の創設期を終り発展期へはいろうとしていた時代で、フレーベルの方式とその恩物が絶対視されている傍らデューイの教育思想やソーンダイクの精神衛生などが教育界に影響を与えつつありました。石原先生の積極的な研究心は強く刺激され更に大学に留って研究を続けたい願望を抱いていたのですが日本側の要請によって一たん帰国

することになりました。

明治四十三年八月に五年間の留学から帰った石原先生は、直ちに、首を長くして待っていた伝習所の宣教師たちを助けて学生の教育と学校運営に当ったのです。大正六年までの七年間、十名に満たない学生を愛し誠心誠意教育しながら一方に伝習所を学校らしい運営に導いて東京府の公認を得るに至らしめました。この年、石原先生は再度の米国留学に発ちました。近い将来米国宣教師に代ってこの学校の校長と併設幼稚園の園長の責任を執るための準備の留学です。

コロンビア大学教育大学保育学科に二年間留学して幼稚園監理者としての資格を得、更に大学院で一年間研究を深め、大正九年八月に帰国して翌十年四月から校長と園長の任に就き昭和四十三年十一月二十七日の永眠の日まで五十三年間この仕事一すじに働き抜かれました。

二度目の留学の時は米国では連邦教育局内に「幼稚園教育課」が設けられていた時代であり、イタリーからモンテッソリーが訪米、ワシントン市に「モンテッソリー教育協会」が結成された直後でありました。コロンビア大学ではデューイやヒルが活躍していました。それで私は石原先生の学生時代のノートかリポートか或は日記でも見たく思って探せる限り探しましたが何ひとつ見つけることができませんでした。学生時代のリポートや卒業の時の論文などは米国の大学に残っているのでしょう。帰国されてからの日記や先生の所に届く手紙類はほとんど英文であったことを記憶していますが、それらは全部、先生永眠後に先生の親友のひとりが焼却されたと間接にききました。前掲の手記は昭和三十八年七月十五日に「東京都表彰規則」によって教育功労者の推薦を受けた時に一式書類に添付した履歴書の説明程度の短かいものです。

大正十二年の卒業生のひとりが昨秋、この学校の八十周年に学生時代を回顧して書いたものの一部をここに引用いたします。

「私は石原先生御帰朝の翌年大正十年四月入学しましたので、先生の新進気鋭に満ちた最も新しい幼児教育の講義を二ヵ年にわたって充分吸収する事の出来た幸な学生でした。

この様な当時としては全く新しい幼児教育の講義を骨の髄まで浸み通る程に吸収させて頂いたのですから、私の生涯を通じ幼児教育の仕事にどれ位役立ったか知れません。……

フレーベルの恩物や「母の遊戯」の書を通して、教育法の原理と実技を学び、その深奥な幼児教育学に私はどんなに驚きと興味をもって接したか知れません。

又モンテッソリーの教育学も併せ学びました。両者に共通することは、幼児教育は大人の設定の枠の中で、詰め込んだり、教えこんだりする単に模倣させる教育ではなく、手、足、五管を使用することによって興味を生ぜしめ経験させることにより、幼児が自ら発見し創造してゆくように指導する開発的保育が真の人間教育であることを本当によく理解することができ、その理論と実技をみっちりと教えて頂きました。この教育法は敗戦を契機として日本の教育、幼児教育にもアメリカの指導があったと聞きますが石原先生の教育法はそのまま日本の幼児教育界にあって何らの改訂を必要としないものであったと思います。

石原先生の律動は日本ではまだ珍らしいものでした。当時は幼稚園のお遊戯なるものは表情遊戯といって大人の作った振付動作を単に模倣して動くのですが、石原先生の律動は音楽を聞いて各自が自由に表現する創作リズムで個性的に独創的に表現するところに価値があることを痛感しておりました。……

二年生になりますと午前中は実習に出かけます。工場地帯、商業地域、上流階層の地域等、変った環境にある幼稚園で、その地域の園児に接し、子供の扱い方を学びとりました。又一週間に一度、主任の先生と一緒に家庭訪問をしました。お母様と親しく面接して、幼児教育の重要さ、キリスト教教育について語り、お母さんの意見等も交換するのでした。

たしか火曜日でしたか、夜の集りがありまして各自、家庭訪問の話、或は実習にこの問題等を語り石原先生は熱心に傾聴して学生によい助言を与えて下さいました。……」

このような回顧を今なお抱いている卒業生は少くありません。私はそういう人たちと会うたびに石原先生は教える立場に立ってからもあのひたむきな教えられる者の姿勢を崩さないで持っておられた教育者であったこととその教え子への感化の大きさを思います。また通算八年間の米国留学の学資も生活費も多くの米国人の献金によって十分に満たされたことは先生の学習する態度と将来への使命感が滲み出ている生活態度に、まわりの人たちが常に感動し尊敬を抱いたのであろうと想像するのであります。当時ニューヨークのある教会の中に生れた「石原キクを支える会」というサークルは今も生きている老齢の残存メンバーが時どき集まって石原先生を追憶しています。

石原先生はピアノ、オルガンはじめ教具の取り扱い方が正しくあること、丁寧であることを厳しく指導しました。また学生の服装と身体の清潔にやかましくそれは自分の健康管理の第一条件であるばかりでなく他人に対する礼儀であるとよく言われました。一生涯を独身で貫き仕事一筋に打ちこんでいたのですが、食事は必ず自分の手料理、パンも焼きケーキも作りました。こういうことは若い日に宣教師の家庭で生活指導を受けたからでありましょう。しかし学生を指導する時の厳しさはピューリタン的な窮屈さや固さばかりではなく、楽しさと広さを感じることが多かったように思います。一つの例としてもうひとりの卒業生の追憶の記を紹介しましょう。

「お芋が大好物の学生が、こっそり焼芋を食べながら受け持ちのピアノの空拭きの仕事をしていました。片手にお芋をもって、乱雑な音をたてて拭いていた所に先生が扉をあけてのぞかれたのです。その人はまっ青になりましたが、先生は何もおっしゃらずに扉をしめて行ってしまいました。翌日先生はその学生を呼ばれました。私は『怖いから一緒に行ってあやまってくれ』と頼まれて二人でおそるおそるお部屋にはいりました。見るとテーブルの上に焼芋が山盛りにして出してあります。先生はニコニコして『あなたはお芋のおいしい所の出身でしたね。私もフランスにいた時あの焼栗より日本の焼芋がずっと懐しかった記憶があります。私も大好きだから皆で頂きましょう』とおっしゃったのです」

石原先生は顔だちも美しかったので生涯を独身で通されたことについて或るとき私は、若い頃縁談も多かったでしょうに迷うことなくこの道一すじに突き進まれたのですか、という意味のことをきいたことがあります。その時の先生の答は「女性は家庭を持つことが一番大きい神と人への貢献である」ということと「好もしい男性からの求婚も幾度かあったがお祈りしていると神さまはあなたの全身全霊の力を用いて幼な子が神を知ることのできる教育の仕事をしなさいとお答えになる。これは神さまからの使命なのです」という意味のことを静かな声で呟くように、にこにこしてもっと詳しく話してきかせられた。

近代科学の目ざましい発達の中で心理学、生理学、教育学の発達も目ざましくて新しい実験、統計、学説、方法、思想などが次々と発表されている現在に一面の幸福を思いますが一方で、人生の大切なものを、それを手段や方法として考え

てはならないことを手段とし方法としてしか考えられない教育者が多く養成されていることを痛感していますが、石原先生は明治末期から大正にかけて米国で、当時の新しい科学、学問、教育思想などと取り組んで意欲的に通算六年間の大学生活をしたのですが、実際の場でそれらを生かし用いるとき、教育の方法と目的とが被教育者に向って、先生自身の意識の中ではっきりと区別されていたと私は見ています。例えば被教育者に対して「だめ」という言葉は禁句であると語る場合、方法として語られていることが多いことを感じるのですが、石原先生にとっては決してだめですという言葉は口から出てこない、それは人間にだめということはないという確信があって心底から他人を尊敬し自分自身の人格を大切にしたかかわりでありました。

また、さりげない会話の中で常に私が感じ取ったことは先生にとって仕事も勉強も生活の手段ではなく幼児に仕えるための自己修練であったことです。「婦人はもっと科学的な知識を正確にもっていなくては幼な子に寄与できないよ」とか「幼児教育に必要な基礎の理論をお母さんたちにも確実に勉強してもらいたい、それはお母さんの生活に必要な基礎でもある」というような断片的な言葉が今、私の脳裡に蘇ってきます。こういう会話はいつもそこに幼な子が何人か遊んでいる場であったことも思い出します。

石原先生が校長時代のこの学校には戦前にも戦後にも支那、台湾、韓国、タイ等から数名の留学生がきていて、寮生活をして所定の学課目を履習し、卒業してそれぞれの母国で幼児教育に尽しています。石原先生もまた永眠の少し前までの四十年間に数回外遊して教育施設を視察したり、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤ、中国等の代表的な教育者と交流したり、外国の教え子を慰問してその仕事を励ましたりしました。

石原キク先生は活字になる業績を残さなかったが「彰栄」―神の栄が彰われるために―と祈った祈りと、先生の恩師ミセス・タッピングの祈り「教え子が幼な子を愛し給うたイエスを見るために」にまことにふさわしい見えない業績を私たちに残されたと思います。その業績は世界中で人知れず働いている多くの教え子の教育者魂となって息をしています。

終りに、石原キク先生は昭和四十二年四月二十九日、永眠の七ヵ月前に、幼児教育多年の功労によって勲五等瑞宝章を授与されたことを書き添えてこの稿を終ります。

（彰栄保育専門学校）